

博士論文

広島県尾道市旧市街地における
自由徘徊ネコとヒトとの共生に関する研究
(要約)

平成 29 年 3 月

広島大学大学院生物圏科学研究科

生物資源科学専攻

妹尾 あいら

第 I 章 序論

近年わが国では、東京都谷中の下町や尾道市旧市街地がネコの街として話題になり、自由徘徊ネコとのふれあいを求める観光客が数多く訪れるようになっている。さらに最近では瀬戸内海の島嶼部や、東北、九州の離島に集団で生息するネコが YouTube やテレビなどのメディアを通じて紹介され、これまで世間から省みられることのなかった高齢化が進む島々に、多くの観光客が押し寄せるようになっていく。しかしその一方で、ネコの糞尿、鳴き声、人獣共通感染症、ダニやノミの発生による公衆衛生の悪化が問題となっている。

以上のように、わが国におけるヒトと自由徘徊ネコとの関係は、観光資源としてのネコの経済効果やネコとのふれあいを通して得られる癒しの効果などのヒトにとって有益な関わりと、ネコによる糞尿被害、人獣共通感染症、ダニやノミの発生などのヒトにとって有害な関わりについて、受益者と被害者の間の利害対立として取り上げられてきたが、動物福祉など、ネコ側の視点からヒトと自由徘徊ネコとの関係が取り上げられることはほとんどなかった。

そこで本研究は、尾道市旧市街地に生息する自由徘徊ネコを 4 年間にわたって調査することで、今後のヒトとネコの共生のあり方について考えることを目的とした。第 II 章と第 III 章ではネコ側の視点に立って動物福祉の問題を取り上げ、第 IV 章と第 V 章ではヒト側の視点に立って公衆衛生の向上方法を考えた。第 VI 章の総括では、第 II 章から第 V 章までの研究結果を踏まえて、自由徘徊ネコ、特に野良ネコとヒトの間の問題を解決するための具体的な方法を提案した。

第 II 章 尾道市旧市街地の自由徘徊ネコの福祉について個体数の経年変化を通して考える

近年わが国では、個体数が増加した自由徘徊ネコを観光資源として地域活性化に利用する動きがあるが、その一方でネコの福祉の現状については明らかになっていない。そこで本研究は、自由徘徊ネコが多く生息する尾道市旧市街地において、3 年間にわたりネコの個体数の変化を調べることで、ネコの福祉の状況を明らかにすることを目的とした。旧市街地を山手地区と商店地区に分け、ルートセンサス法を用いて月に 8 回調査を行った。その結果、総調査数は計 289 回に上った。調査 1 年目に、山手地区に 124 頭、商店地区に 80 頭ものネコが生息していることが明らかとなった。またその多くが野良ネコであった。山手地区の 124 頭と商店地区の 80

頭の中で、2年後に生息を確認できた個体は25頭と14頭だけであった。他地域へのネコの移動が難しい環境にあること、また両地区で健康状態の悪いネコが多く認められたことから、観察されなくなったネコの多くは、病気や怪我によって地区内で死亡したものと考えられた。以上の結果から、旧市街地に生息する野良ネコの福祉の状況はかなり深刻であることが明らかとなったので、今後は繁殖の制限とともに健康管理の必要性が指摘された。

第三章 尾道市旧市街地の自由徘徊ネコの福祉について給餌行為を通して考える

都市部の住宅街や観光地に生息する自由徘徊ネコのうち、野良ネコは一部住民や観光客が与える餌に依存しており、これらの食糧源が個体数の増加の一因となっていると考えられている。特に旧市街地の山手地区では、野良ネコに対する給餌行為が確認されているが、この行為がネコの福祉に及ぼす影響については明らかとなっていない。そこで本研究は、山手地区の5つの給餌場所で餌を与えられている給餌個体と、給餌場所には来ない非給餌個体の間で福祉の状態と行動を比較することを目的とした。その結果、給餌個体は43頭で非給餌個体は144頭であった。一つの給餌場所では給餌以外に健康管理と不妊去勢手術がなされていたが、非給餌個体には手術されている個体は1頭もいなかった。また給餌個体の方が非給餌個体よりも健康に問題のある個体の割合が有意に低かった。一方で、給餌個体の方が非給餌個体よりも人馴れしている個体の割合が有意に高く、給餌行為によって野良ネコが一定の行動圏内に居着くことが示唆された。以上の結果から、健康管理と不妊去勢手術を伴った継続的な給餌は、ネコの健康と福祉の状態を良好にすることが示唆されたが、その一方で給餌行為は特定のエリアに多数のネコが棲み着かせてしまうので、糞尿被害などの地域問題に発展することが危惧された。

第四章 尾道市旧市街地の自由徘徊ネコによる糞尿被害の軽減について酢酸及びイソ吉草酸を含有した忌避剤の効果の検証を通して考える

近年、自由徘徊ネコが増加したことで糞尿被害が深刻化し、社会問題に発展している地域もある。その解決の一助として、効果的なネコ用忌避剤を開発することが考えられる。そこで本研究は、自由徘徊ネコが多く生息している山手地区の4つの寺院において、猛獣の糞の臭いを人工的に再現した酢酸及びイソ吉草酸を含有する忌避剤が、自由徘徊ネコの寺院への侵入行動と墓地における排糞行動を抑制する効

果を検証することを目的とした。対照期間（忌避剤設置前期間）を経て、忌避剤の試験期間を約 5 か月間設けた。その結果、境内に設置した忌避剤は、侵入回数を有意に低下させることができた。また墓地に設置した忌避剤は、ネコの排糞量を有意に減少させることができた。しかし、忌避剤の臭いがヒトにとっても不快感を与えることから、ヒトが頻繁に訪れる場所で利用するためには臭いの改善が必要であることが指摘された。

第V章 尾道市旧市街地の自由徘徊ネコによる糞尿被害の軽減について酢酸、イソ吉草酸及びシトラールを含有した忌避剤の効果の検証を通して考える

第IV章において効果の認められたネコ用忌避剤にシトラールを添加することでヒトに対する不快臭の低減を試みた忌避剤の効果を検証することを目的とした。実験は第IV章と同様に 4 つの寺院で実施した。第IV章の研究に引き続いて、対照期間（忌避剤設置前期間）、ダミー期間（忌避成分を含まないダミーの忌避剤設置期間）を経て、シトラールを添加した忌避剤の試験期間を約 4 か月間設けた。その結果、シトラールを添加した忌避剤は、シトラールを添加しない忌避剤と同様にネコの侵入行動に対して一定の抑制効果を示したが、排糞行動に対する効果は若干不安定であった。以上の結果から、ヒトが頻繁に立ち寄らない場所については第IV章で検証した忌避剤が糞尿被害の軽減に有効であり、ヒトが頻繁に立ち寄る場所ではシトラールを添加した忌避剤を設置することで、ある程度の軽減効果があるものと考えられた。

第VI章 総括

総括では、以上の研究結果を踏まえた上で、旧市街地に生息する野良ネコの対策を提案することを目的とした。まず、旧市街地に生息する自由徘徊ネコの個体識別と生息個体数の調査を行うとともに、ヒトに対する馴れの程度と外貌による健康状態の評価（福祉の評価）を行う。人馴れしている個体の中で不妊去勢手術を受けていない個体は、捕獲して手術を施すと同時に血液検査を行う。また、人馴れしている個体で病気や怪我をしている個体については捕獲して治療する。人馴れしている個体で、手術を受け、血液検査も済んだ健康な個体は、動物愛護センターや動物愛護団体などを通して里親募集を行う。人馴れしていない個体で、不妊去勢手術を受けていない個体は、動物愛護センターの協力を得て、罠用ケージなどを設置して捕

獲し、血液検査をする。ネコエイズなどの伝染性の病気に罹患している陽性個体は動物愛護センターで安楽死処分する。一方で、伝染病に罹患していない陰性の個体は、手術をした上で元いた場所に戻し、その後は地域猫活動などによって飼育管理を行う。地域猫活動の結果、人馴れするようになった個体は、里親を募集する。不特定多数の観光客と一部の住民によって無原則に行われてきた野良ネコへの給餌を規制する。無人の餌販売所を設置し、餌から得た収入は地域猫活動に還元する。ネコ用忌避剤とネコ用公衆トイレを尾道市が管轄する旧市街地の公園や公共施設に設置し、ネコをトイレに誘導する訓練を実施する。上記の活動の結果、野良ネコの個体数は減少することが予想されるので、観光資源としてのネコの利用は主に自由に徘徊している飼いネコを対象とする。以上の活動を実施するためには、地域住民、尾道市、尾道観光協会、動物愛護活動に携わるボランティア、広島県動物愛護センター、ネコを研究対象とする研究者などの連携による協働型運営が必須条件である。